

ナイロビの蜂

2006(平成18)年5月13日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督＝フェルナンド・メイレス／原作＝ジョン・ル・カレ『ナイロビの蜂』（集英社文庫刊）／出演＝レイフ・ファインズ／レイチェル・ワイズ／ダニー・ヒューストン／ユベール・クンデ／ビル・ナイ／ピート・ポスルスウェイト（ギャガ・コミュニケーションズ配給／2005年イギリス映画／128分）

……ケニアのナイロビには、貧困の他エイズや結核など深刻な社会問題がいっぱい……。そんなナイロビのテントで医療活動に従事するのは、この映画で見事アカデミー賞助演女優賞を受賞したレイチェル・ワイズ。こんな彼女に対して牙を剥く、製薬会社をメインとした「巨悪」とは……？ そして、妻死亡後、夫がその軌跡を追う中ではじめて知った妻の実像とは……？ 美しい「夫婦愛」に胸を打たれること必至の感動作だが、微動だにしない(?)「巨悪」に対しては、多少のいらだちも……？

原作は？ 監督は？

私は全然知らなかったが、この映画の原作『ナイロビの蜂』を書いたジョン・ル・カレは、自らイギリス外務省の一員として大使館等で仕事をした経験のある人物。したがって、彼は、その自らの経験を踏まえたうえで(?) たくさんのスパイもの小説を書いた超有名な作家というわけだ。ちなみに、日本で最も有名な作品は『寒い国から帰ってきたスパイ』で、リチャード・バートン主演の作品を原作にした映画『寒い国から帰ったスパイ』(65年)は、ものすごく面白かったもの。

また、この映画を監督したフェルナンド・メイレスは、私が観ることができずに残念に思っている『シティ・オブ・ゴッド』(02年)の監督で、ブラジル人とのこと。今回の映画については、ケニアの現地での撮影にこだわったらしいが、

それはこの映画を観れば一目瞭然。しかし、この映画のテーマである「夫婦愛」の表現の仕方を見ていると、この監督は「問題提起型」ばかりではなく、恋愛モノの描き方も超一流……。今後も注目しなくては……。

新しいタイプのヒロイン誕生！

この映画のテーマは「美しい夫婦愛」だが、それをリードするのは、男性のジャスティン・クエイル（レイフ・ファインズ）ではなく、女性のテッサ・クエイル（レイチェル・ワイズ）。

まず最初のこの2人の出会いが面白い。外務省アフリカ局長であるサー・バーナード・ペレグリン（ビル・ナイ）の代理として講演を行った一等書記官のジャスティンに対して、講演終了後、イラク戦争へのイギリスの加担の仕方について手厳しい質問を浴びせたのが、「活動家」のテッサ。多分、物静かな英国紳士のジャスティンにとって、そんな彼女が物珍しくかつ魅力的に見えたのだと思うが、そこで大胆にもジャスティンはテッサをお茶に誘うことに。するとスンナリとそれを受けたテッサはその後、ジャスティンを自分の家に招き入れ、そのまま2人は愛し合うことに……。

こりゃ、あまりにもうまくいすぎだと思うが、長い物語を2時間余の映画にまとめるためには、この方が手っとり早い(?)うえ、こんな流れになったのは、2人が直感的に魅かれ合ったせい……。そのうえ、今度はアフリカ行きの命を受けたジャスティンに対して、テッサが「私もアフリカに連れて行って……」と迫った。その真剣さに驚くジャスティンに対して、彼女が求めたのは「Yes or No」という答えだけ……。魅力的で情熱的な女性からここまで迫られれば、男たるものさでどんな決断を……。かくして、2人は「夫婦」としてケニアのナイロビに赴くことに……。しかし、お互いのことをよく知らないまま、直感的に愛を感じてここまで来た2人だが、現実が現実。ホントにこの2人の仲は大丈夫……。だって、ナイロビでテッサが目指していた活動とは……？

こんな女性テッサを演じたレイチェル・ワイズは、見事アカデミー賞助演女優賞とゴールデングローブ賞の助演女優賞に輝いた。これはもちろんレイチェル・ワイズの演技力もあるが、テッサという女性に与えられた新しいタイプのヒロイ

ンとしての魅力によるところも大……。

活動家の妻 VS ガーデナーの夫

ジャスティンとテッサがお互いに愛し合っていることはまちがいないが、思想的にも社会的な立場においても、2人が大きな矛盾を孕んだ関係にあることは誰が見ても明らか。したがって2人の間には、お互いの（というより夫が妻の）人生（というより仕事）に干渉しない、という「約束」ができていたことが、2人の会話を聞いているとよくわかる。

ナイロビにおけるテッサの活動は、エイズや結核などの病気に苦しむ人たちのためのスラム地区での医療状況の改善。その活動に付き添ったのが黒人医師のアーノルド・ブルーム（ユベール・クンデ）だが、夫婦以上にいつも一緒にいるこの2人に対して、周囲からは好奇の目が……？ 出産直前の身重の体にもかかわらず精力的に活動を展開するテッサを、ガーデニングに精を出しながら気遣うガーデナーのジャスティンだったが、ジャスティンにできることはそれだけ。テッサの活動の内容に立ち入ることはできないまま、テッサを信頼し、じっと見守ることしか、ジャスティンにはできなかった。

映画の冒頭は？

映画の冒頭は、今日も医療活動のためにアーノルドとともに飛行機に乗り込むテッサをジャスティンが見送るシーンから。「じゃあ、2日後に……」と別れた後、スクリーン上には転覆した車両の姿が……。そして、それに続くのが、ガーデニングに精を出しているジャスティンに対して、ジャスティンの上司で友人であるサンディ・ウッドロウ（ダニー・ヒューストン）が、テッサの死亡を知らせるシーン……。テッサは、トゥルカナ湖の南端の地で殺されたらしいとの報告だった。なぜテッサが殺されることに……？ テッサは一体どこで、どんな活動をしていたのだろうか……？

「巨悪」はどこに……？

パンフレットによれば、ジョン・ル・カレの原作本はケニア政府の腐敗を描い

ていたため、ケニアでは発禁本扱いだったし、イギリスの外交筋もこの小説に批判的だったらしい。ケニア政府の腐敗とイギリス外交筋を巻き込んだ「巨悪」とは、大手製薬会社のスリー・ピーズによる新薬開発のための人体実験と、巨大な富の搾取……。

この映画は、その詳細なシステムの紹介はしないし、その巨悪の本質に迫っていくことはしない。逆に、そこにメスを入れようとしたテッサや、テッサ死亡後その志を継いだジャスティンに対する巨悪組織からの「報復」の姿しか見せてくれないが、映画全体を通して、そんな「巨悪」が存在することはよく実感できる。そして、こんな「巨悪」が医療分野はもとより、石油や武器などあらゆる分野にも……？

サンディはワル……？

ジャスティンに対してテッサ死亡の知らせを伝えにきたサンディは、ジャスティンにとって最も信頼できる友人だったが、テッサは自分たちの活動の前進のために、このサンディからも重要な情報を手に入れようとしていたことが、テッサ死亡後、残された手紙の中から明らかに……。そして、何とテッサはその情報を手に入れるため、「女の武器」までサンディに提供しようとしていたことも……？ さて、そんな手段を使ってまでサンディから重要な情報を入手したテッサはどんな行動を……？ また、それを知ったサンディは、どんな対応策を……？

こんなサンディを見ていると、結果的に彼は巨悪の片棒を担ぐことになったわけだが、その役割は彼以外の多くの人たちにも分散されているため、彼の良心の呵責はほんの少しだけ……。したがって、そんなサンディをワルと言うのは、少し酷すぎるかも……？

意外な人物2人

この映画における、夫婦愛の物語は、すごくシンプルでわかりやすい。しかし他方、製薬会社による人体実験を中心とする「巨悪」の姿と、それに結びついたさまざまな組織や人間の姿は複雑で、なかなかわかりにくいもの……。そんな中、映画後半には、偽造パスポートによって再度ケニア入りしたジャスティンの周り

には2人の意外な人物が登場する。

その1人は、パートナー会社のKDHに見限られて、破産寸前となった製薬会社スリー・ピースの経営責任者ケニー。ケニーがジャスティンを案内したのは、テッサが子供を死産した時に一緒に病室にいた黒人少女のワンザたちが眠る墓地。さて、ここには、どんな人たちが、どんな理由で眠っているのだろうか……？

もう1人は、テッサが書いた告発レポートを入手するため、ジャスティンが国連の飛行機で向かったスーダンで出会うことができた医師のロービアー（ピート・ポスルスウェイト）。

取材に来た記者だと名乗るジャスティンに対して、スーダンでの活動を紹介しているうち、ジャスティンがテッサの夫であることが明らかになっていったが、そこからさらにロービアーの口から語られる真相とは……？

巨悪への鉄槌は……？

イギリスへの帰国命令が出されたジャスティンが再度ケニアに入国するについて、協力をしたのはテッサの従兄のハム。自分の死を決意して、妻が死亡したトゥルカナ湖の湖岸に1人腰を下ろしたジャスティンが、国連機の機長に託した最後の手紙の宛て先は、ローマにいるテッサの叔母さん宅。

今日、ジャスティンの葬儀には、アフリカ局長のペレグリンが出席し、ジャスティンのいかにも英国紳士らしい(?) 静かな自殺を悲しむとともにそれを称えるスピーチを行ったが、その後同じ演壇に立ったのが、ジャスティンの手紙を手にしたハム。テッサもジャスティンも「巨悪」に対して何のクサビも打ち込めないまま無念の敗北死を遂げたのかと思っていたが、そこはさすが優秀な一等書記官……。ジャスティンの手紙を読み上げるハムの声にたちまち周囲はざわめき始めるとともに、ペレグリンはその場を逃げるように席を立った。しかし、それを追いかけるのは多くの記者たち。さて、テッサとジャスティンの尊い犠牲は、どのように報われるのだろうか……？

小泉総理に続いてアフリカへ……

今年のゴールデンウィーク中は、留守番役の安倍晋三官房長官を除く、ポスト

小泉候補の福田康夫、麻生太郎、谷垣禎一はそれぞれ「外遊」し、その存在感をアピールするのに躍起……？

そんな中、小泉総理はアフリカのエチオピアとガーナを訪問したが、日・ガーナ首脳会談において小泉総理が提案したのがアフリカに貢献した医学者・医療従事者等を対象とした「野口英世賞」の創設。彼はこれをノーベル賞に匹敵する栄誉ある賞にしたいとアピールしているが……。

それだけ価値あるものになるかどうかはともかく、ややもすれば「島国根性」で内に閉じこもりがちな日本（人）が、遠くアフリカに目を向け、さまざまな援助や貢献のあり方を提案し、実行していくのは大切なこと。

そんなアフリカへの援助問題を考える場合、大いに役立つのがこの映画……。私の期待どおり、公開初日の朝1番の上映は、約9割の入りだったが、やはり気になるのは年配者が多いこと。若い人にこそこんな映画を観てもらい、夫婦愛のすばらしさに感動してもらう必要があると思うのだが……。

2006(平成18)年5月13日記

ミニコラム

相次ぐ知事の逮捕は……？

土建国家ニッポンの原型をつくったのは日本列島改造論を唱えた田中角栄。それから三十数年後の今、細川連立政権の例外はあったが、自民党政権下での「この国のかたち」は全く変わっていない。福島県の佐藤栄佐久知事や宮崎県の安藤忠恕知事の官製談合事件は「ああ、またか」だが、和歌山県の「改革派の旗手」木村良樹知事の逮捕

にはビックリ。中国ではやっと胡錦濤国家主席が全権を掌握し、江沢民前国家主席をバックにした「上海閥」を一網打尽にしているが、中国でも日本でも腐敗の基本構造は全く同じ。悲観せず、身の回りから1つずつクリーンにしていくしか手はないのだが、腐敗の連鎖を一体どう考えればいいのか？

2006（平成18）年11月22日記